

得体の知れない昆虫の減少

私たちが知らない、あるいは十分理解できていない理由で昆虫が減少するという不思議な現象が起きている。昆虫の種が絶滅するのではなく(絶滅も多少は起きているだろう)、それぞれの種の個体数が激減しているのだ。これは白神山地に限ったことではなく、世界的な現象である。30余年前であれば、林道脇に咲くノリウツギやセリ科の花には羽音がうるさいほどハナアブやハナバチ、カミキリムシなどが訪れていたし、土場に積まれた木材の上には昼となく夜となく、さまざまな甲虫や寄生バチが集まっていた。濡れた路面ではミヤマカラスアゲハやコムラサキなどの蝶が大きな吸水集団を作ること稀ではなかった。こうした光景は最近では滅多に見ることができなくなってしまった。残念ながら、「いた」、「いない」という単純な記録とは異なり「どれだけ」いたかというデータは少なく、今の状況を直接比較することは簡単には出来ないが、このような昆虫の減少は長年昆虫の調査を行っている人の多くが感じ、危惧していることである。



一見すると白神山地の自然は環境変動の影響を受けていないように見える

生物相の解明が急務

縄文時代から変わらず続いてきたとされる白神山地の自然は、現在、大きな変化の中にある。地域の自然の状況を把握するには、そこに住む生物相の解明が欠かせない。どのような変化が起きているかを知るためには、元の情報がなければ議論にならないからだ。「木を見て森を見ず」という言葉がある。些末にとらわれていては大局が見えないという意味だが、実際には森を理解するためには木を見て、草を見て、そこに住む虫たちにも目を向ける必要がある。

このような変化の中にありながら、白神山地には依然として美しい自然景観と豊かな生物多様性が残されている。白神山地の生物相については世界遺産登録前後に大掛かりな調査が行われたが、未解明の部分が未だ多く残されている。弘前大学白神自然環境研究センターでは、自然環境や生物相の変化を捉えるため、動植物の標本や気象データの収集、このような調査活動に携わることのできる人材の育成に取り組んでいる。

※「白神山地世界自然遺産登録30周年記念 生物多様性総合調査報告書」弘前大学白神自然環境研究センター(2024)から、一部内容を改変して転載



踏査し記録に残す作業は欠かせない

白神山地ビジターセンターだより

SHIRAKAMI

No.
45
2024春号

白神山地世界自然遺産登録30周年記念

白神山地の 生物多様性

日本初の世界自然遺産として
屋久島と共に白神山地が登録されてから30年を迎えたことを記念し、
今号では白神自然環境研究センター長中村教授より、
白神山地の地域環境の変化について
特に生物多様性に焦点を当てて寄稿していただきました。

白神山地ビジターセンター

〒036-1411 青森県中津軽郡西目屋村大字田代字神田61-1
TEL.0172-85-2810 FAX.0172-85-2833
HP <https://www.shirakami-visitor.jp/>



ホームページ



ツイッター



フェイスブック



インスタグラム



白神山地 世界自然遺産 登録からの30年

弘前大学 農学生命科学部附属 白神自然環境研究センター

センター長 中村 剛之

白神山地が鹿児島県の屋久島とともに世界自然遺産に登録されてから30年の月日が流れた。これを記念して、青森県や秋田県ではさまざまな記念行事が行われ、テレビや雑誌で特集が組まれ、改めて紹介されることも多かった。白神山地を語る時、8000年前から変わらないブナ林というニュアンスで伝えられることが多い。ここには縄文時代から人が住み着き、山の恵みを糧にした慎ましい暮らしが近年まで続いてきた。また、その自然も長い間、ほとんど姿を変えずに続いてきたと考えられる。今も、ブナを中心とした森林にはイヌワシやツキノワグマを頂点に多様な生物が暮らし、ほぼ手付かすの自然が残されている。まさに悠久の森である。しかし、現在では地球上のあらゆる地域で急激な環境変動が進んでいる。残念ながら、白神山地も例外ではないはずだ。

世界遺産登録からの30年は、この地域にとってどのような期間だったのだろうか。特に生物多様性の面から振り返って考えてみたい。

10年前の問題提起

今から10年前。弘前大学では、白神山地の世界遺産登録20周年を記念して、「白神山地を学び直す」というシンポジウムを開催した。白神山地で環境保全やガイドに取り組む有識者に加えて、屋久島、知床半島などから講師をお招きし、自然環境の保全や観光利用について、それぞれの地域が抱える問題や取り組みを話し合った。この中で大きな課題として話題にあがったのが、地球温暖化に代表される環境変動、そのモニタリングと対応、ニホンジカによる食害と外来種の問題であった。いずれの地域もこうした変化にさらされて、対策に四苦八苦という状況であった。各地の現状や取り組み事例の紹介の後、他県から参加した方々から「白神山地はニホンジカや外来種の問題が顕在化していないから羨ましい」という感想と、そうした問題は今後必ず起こるから、呑気に構えていないで「とにかく打てる手は今の段階から可能な限り打っていかねばだめだ」という指摘があった。当時、白神山地ではニホンジカがごく稀に目撃される程度であったし、ナラ枯れも起きていなかったが、参加者の多くは白神山地でも間近に迫っている大きな変化に対して一定の危機感を共有したものだと思う。

地球温暖化と生き物の変化

気温の上昇や気象現象が激烈になる様や、桜前線をはじめとする生物季節の変化は、街に住む私たちも最近では肌で感じるが多くなった。それでも、白神山地などの自然の景観には大きな変化がないように見える。これは森林景観を作っている木々の多くが100年以上の長い寿命を持っていることから、環境の変化が未だ森林が許容できる範囲の中に収まっているからに違いない。しかし、寿命が短く、移動分散能力が高い昆虫などの動物に注目すると少し様相が異なっている。

私は2018年から、学生や市民研究家の協力のもと、白神山地に生息する蛾類の調査を始めた。蛾の多くが幼虫時代に植物を食べて育つ食性の昆虫であることから、植物種を含む森林の豊かさを測る目的でこの調査を始めたのだが、アシプトクチバ、ハナジロクチバなどの南方系の種や分布北限を更新する発見が相次ぎ、思いがけず、近年の温暖化の影響を知ることとなった。

蛾の他にも、世界遺産登録以降に南から分布を拡大して白神山地に侵入した昆虫がいくつも知られている。ヤマトシジミは秋田県の南部がもともとの北限とされていた小さな蝶の一種だが、徐々に北に広がって2000年には初めて白神山地の西側の海岸沿いで見つかった。現在では青森の各地で定着している上、2010年代の後半には津軽海峡を渡って北海道まで広がった。さらに、アオスジアゲハ、クロアゲハ、キタキチョウ、ツマグロヒョウモンなどの蝶類、コカマキリ、ショウリヨウバッタなどが最近になって白神山地に定着した。

温暖化の影響による分布の北進はこのように多くの昆虫で確認されていて、これからも続くと考えられる。白神山地でも、生物多様性の大きな変化が始まっている。

ニホンジカ定着の懸念

ニホンジカは現在、日本各地で分布を拡大し、個体数が増えて食害による森林や農業被害が深刻なものとなっている。個体密度が低いうちは影響がないが、森林の許容量を超えて増加すると林床植物が一掃され、森林が更新しようにも稚樹が食べられてしまう。

秋田県と青森県では、幸か不幸か、ニホンジカは明治期に一旦絶滅している。そのため、森林は最近まで食害を免れて、豊かな林床植生が維持されてきた。しかし、白神山地とその周辺でのニホンジカの目撃例が2014年(前述のシンポジウムの翌年)から目に見えて増え始め、2022年には前年の3倍に跳ね上がった。今後は生息個体数がある程度増えたことによって、雌雄の出会いも増え、個体数が加速度を増して増加することが考えられる。近い将来、白神山地で山菜採りやキノコ狩りを楽しむことができない時代が来るのかもしれない。



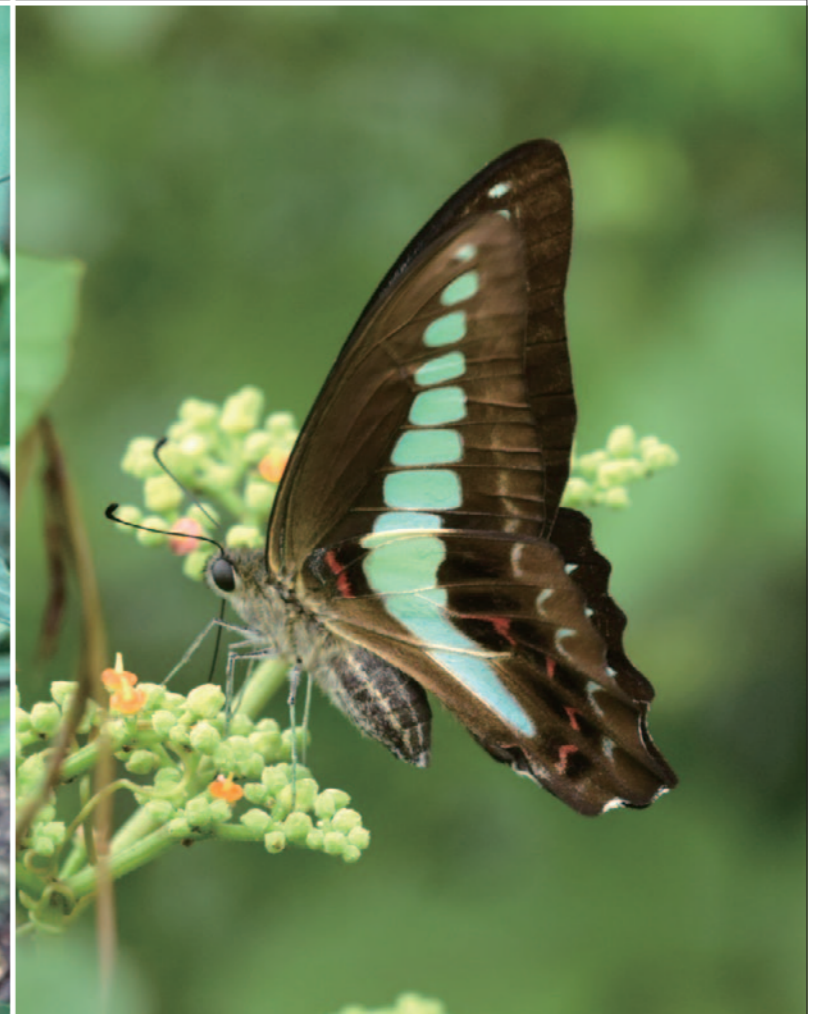
アシプトクチバ
南から飛来するのかわ定着しているのか白神山地周辺で確認されるようになった



2000年に白神山地への侵入が確認されたヤマトシジミ
(写真:工藤忠氏)



コカマキリも最近青森県に入り込んだ昆虫の一つ
(写真:工藤忠氏)



照葉樹林の蝶であるアオスジアゲハも白神山地で見られるようになった
(写真:工藤忠氏)